

## 第二章 状況の意味(二) ラジカリズムの二十年

### 第一節 大衆の貧しい主体性——生産の喪失

#### 市民社会派マルクス主義

さて、高度成長期一九六〇年代の終りに、学生活動家たちが、廣松渉氏とともに平田清明氏のマルクス学を好んで読んだ一時期があった。廣松氏や平田氏の「引用」を通してであれ、活動家がマルクスを読んだ最後の時期が、この時にあたっているということができる。しかしそれにして、純粹にアカデミーのなかからでてきた平田マルクス学が、この時期に活動家に読まれたことは奇妙なことに見える。当時、私も必要に迫られて『市民社会と社会主義』に目を通したが、しいていえば、経済決定論的なマルクス主義の階級社会—階級国家論にうんざりして、彼らは平田氏の市民社会—市民国家論にひかれたのだと納得することができるとは、だからこの時期は、アカデミックな仕事と運動の問題意識とが、公然と接触しえた最後でもあったであろう。

さきに私は、「戦後社会」についての安保闘争後の反省が、私をどのように「ヘーゲルとマルクス」の問題に近づけたかを想起してみた。安保闘争は、戦後社会が「市民社会と国家の分離」という事実を、「近代国家」「国会」という形式で統合しえた一瞬のごとくに、当時は考えられたのだった。

しかし今日あらためてふりかえってみれば、「ヘーゲルとマルクス」問題はちがった見え方をする。——つまり、すでに書いたように、ヘーゲルをとことん批判しつくそうとする若いマルクスの勢いは、市民社会と国家の「分離」というヘーゲルの認識を、政治と非政治、公と私との極端な背反の確認にまでつきつめさせたのだった。すでに一九六五年頃、吉本隆明氏がこのような読み方をしていたが、思えば、戦後社会が解体しつつある状況を、氏もまた反映していたのかもしれない。「階級」の解体——「大衆」のアトミズム——という、六〇年以降の状況を確認するいま、私もまた右のような「ヘーゲルとマルクス」の理解を強いられる。

こうした見方からすれば、若きマルクスの政治国家—市民社会観は、後年の階級社会論の「萌芽」でもなければ「未熟」な形でもない。両者はそもそも筋がちがうのだということになる。ところが、「ヘーゲルとマルクス」問題の伝統的な解き方は、周知のようにヘーゲルの設定した国家—市民社会の上下関係を、マルクスは逆倒して足で立たせたのだと教える。

だがすでに指摘したように、このような読み方は、じつは後年のマルクス主義の階級(闘争)論を、初期マルクスに重ね読みする結果にほかならない。国家と市民社会の上下関係に、ブルジョア国家権力対プロレタリアートという図式が、暗黙のうちにあてはめられているのである。

ところで一九六〇年代の終りに読まれた平田清明氏のマルクス学は、以上のような問題にたい

して、もう一つ別の接近の仕方をするところに、特徴的なポイントがおかれていた。一口にいつて市民社会と（市民的）国家の分離・背反そのものを、認めまいとするのであった。

思うにこれは特に平田氏だけに特異なことではない。マルクスの市民社会論を、ドイツとヘーゲルの観点からではなく、むしろ当時の先進国、イギリスやフランス、したがってアダム・スミスやルソーとの関連で見ようとする学者たちに、これは共通する視点であろう。たとえば高島善哉氏が書いている。――

市民社会は経済の面からみれば、一つのコモンウェルス（文字どおりに共同の富という意味）である。個々の市民は、それぞれ自分自身の経済的利益を追求しながらコモンテイとしての市民社会の富を増大させる。コモンテイという言葉は、市民社会の政治的行政的な側面を表わす言葉であるのにたいして、コモンウェルスという言葉は、市民社会の経済的物質的な側面を表わす言葉だとみていいだろう。コモンテイもコモンウェルスも、一つの共同体としての市民社会の二つの側面をいい表わしているだけのこと、もともとは一つのものなのである。（『民族と階級』）

せんじつめていえば、スミスが書いたように、市民的国家（ステイト）と社会（コモンウェルス）は同じものであり、成立期の市民社会像には「いわゆる国家と社会の対立というようなものはない」（高島善哉『アダム・スミス』）というのである。

したがってまた高島氏は、「ヘーゲルとマルクス」オンパレードのマルクス主義者にはつきりと批判的だ。「マルクス主義の系譜に属する人たちも、国家論といえば何よりもまずマルクスの『ヘーゲル国法論批判』を念頭に思い浮かべるところから、国家と市民社会の関係はどうか、国家が市民社会の上にあるのか、それとも市民社会から国家が説明されなければならないのかという問題の出し方をするのに馴らされてきた。ところがこれらの人は、いずれも、ドイツ的地平で問題提起であったことに気がつかなかったのである。」（『民族と階級』）

なるほどと、私には高島氏の指摘に納得するところがある。たしかに、「ドイツ的地平」での「ヘーゲルとマルクス」問題の多くには、私もまたうんざりしてきた。だから、高島氏ら「イギリス・フランス的地平」での問題提起にたいして、すぐさまとびだす批判、つまり、「市民社会」も現実には「資本主義社会」であり、「市民的国家」は「階級国家」じゃないかという反論にも興味はない。

私の感想は、むしろここでもまた「戦後社会」のことに飛躍する。――あれは、わが国で、近代の「国民国家」の幻想が成り立った稀有の一瞬ではなかったろうか。戦後民主主義と国民運動のうちには、「いわゆる国家と社会の対立というようなもの」は、たしかになかったのだ。理論的思考をしようとするとき、「国家」もこれに対立する「社会」というものも、当時私には経験的にわからなかったのは、もつともというしかない。

「産業人」の個体から「大衆」の私へ

このように、戦後社会Ⅱ国家の経験から見るかぎり、高島氏や平田氏ら「英仏派」の市民社会論は、私には納得がいかないわけではない。ところが実際には、「大衆社会」の症候群が誰の目にも明らかになった一九六〇年代の終りになって平田清明氏のマルクス学は読まれたのである。これはどうしたことであろうか。

たとえば平田氏の一文を引こう――

人間がその現実の個体的人間のままで、個体（個体的所有）と類体（共同的所有）との直接的統一を実現していくこと、個々の個体的人間に固有な力を社会的力として自己組織していくこと、この意味でのコミューン主義こそ、マルクスのコミニズムの精髓であります。（『市民社会と社会主義』、以下同じ）

この一文は、ことわるまでもなく、ルソーに関連したマルクスの有名な文章（『ユダヤ人問題』）のパラフレーズである。若いマルクスの「人間の解放」の立場が賞揚されているわけだが、むしろそれだけではない。「市民社会」は政治的にみればコミニティ（ルソーのいう政治体Ⅱ市民国家）であり、これは、自由な個体（個体的労働・個体的所有）によって構成されるという、平田氏らの市民社会論がそのベースになっているのである。

マルクス主義はこの社会を資本主義社会ととらえるが、その歴史的前提および理論的基底には、このような市民社会（論）がある。労働は「市民社会の外形においては」あくまで私的な労働であり、所有もまた私的・排他的な所有なのだが、「市民社会の内実においては」、個体的労働であり個体的所有である。したがって、マルクスのコミニズムも、生産力を歴史的媒介として、このような個体的労働・所有の開花、コミニティという市民社会の内実のまつたき実現にほかならない。

だが――と私はいまも思うのだが、「戦後社会」の後の今日「階級」を解体された個々の「大衆」は、右のような理論の言葉――「個体」――によってうまく写せるものだろうか。いや、大衆の急進主義は「個体の開花」を求めるものとみなしうるのか。

当時の学生たちがどのような気持で、「個体の開花」を受けとったかは、私にはわからない。六〇年代末から顕在化した大衆のラジカリズム――その「反近代の思想」――は、たしかに「個人原理」の追求を特徴としたのだが、しかしこの「個人」は、市民社会論の「個体」とあいかわうところがすこしでもあろうか。大衆のラジカリズムの「否定」の性格から見るかぎり、ことごとくがこの類推を裏切る。

実際、平田氏の「個体」は、市民社会Ⅱ近代社会成立の母体となった自由な市民、つまり、アダム・スミスのな「商人」や「産業人」のイメージにこそ合致するが、大衆とはまさに産業人たること――その階級意識――から疎外された者たちなのである。

平田氏はもとより、市民社会が資本主義社会に歴史的に先行した社会だとはいわない。しかし、あえて市民社会という言葉を選びたいことに付着する、「産業の進歩」というイメージは、

氏自身において消すことができない。たとえば――

ブルジョアの日常感覚でさえ、人類の精神史のうえでは、一步前進である。いや、自他の区別のないべつとりとした共同体的関係に埋没した人間の自己感覚にくらべれば巨大な進歩である。市民社会は、私的排他性の制約においてではあるが、自他の区別を確立することによって、逆に、個体と類体との関連を意識させ、個体としての自己を我がものにさせるからである。そこに成熟する日常感覚は、ブルジョアの汚れているとはいえ、市民社会の本質をさぐることを可能にし、人類の人間としての未来を展望させるからである。

これはまた、なんとという極楽トンボのものいいではあるまいか。私は前章に花崎皋平氏の「個人原理」を例示したが、その「三人称の私」の追求が、平田氏の「個体の開花」とまったくのころ異質であることは明らかである。

今日の「大衆」の個体は、急進的運動の志向するものとしてすら、進取の気性に富んだかの「産業人」「商人」等の「主体性」を欠いている。そしてさらに、これら大衆の交通関係の「内実」に、いうところの市民的国家のコミュニティ（コミュニティ）を透視することなどできはしない。アダム・スミス風の「協業」の相互関係は、いまや「管理」のネットワークと化し、このネットワークのなかで大衆はアトミズムの相互連関にからめとられている。ひとは「個体」でも「近代的我自我」ですらなく、抽象的で貧しい、孤立した主体性であるほかないのだ。このような個人をもってして、なにが市民社会か、なにがコミュニティか。

さきの引用にもあったように、平田氏の市民社会―市民的国家論は、ルソーの流れをくむ若きマルクスの「コミュニティ」に、その市民社会論を整合させる試みともなっている。だが弱年時代のマルクスの求めたコミュニティにはアダム・スミスのコモンウェルス（コミュニティ）――かの「悟性国家」！――とすこしでもあいかやうものがあつたらうか。すでに指摘したとおり、この国家の統一性はマルクスにとつて「欺瞞」にすぎず、この批判が彼のコミュニティをむしろヘーゲルの理性国家の論理に近づけたのだ。

とりわけ今日のラジカリズムが志向するコミュニティは、スミスなどとすこしも通じはしない。反乱の共同観念がもつ強い求心性がそこには働いており、これがコミュニティを、むしろ決定的に「全体主義的」にみせるのである。マルクスの場合も、ルソー・ヘーゲルの「国家」の系譜で考えるかぎり、まったく同様のはずだ。

こうして、私は思うのだが、平田氏らの市民社会論は――マルクス論としても――、六〇年代末ではなくまさに「戦後社会」にこそ、ふさわしいものではなかつたらうか。そこにおける「人的階層」の人びとのことを、ちょっとでも想起してほしい。またこのような人びとの相互交通が、どのような意味で、戦後の「市民的國家」を形成したのかを。あるいはそこに、市民社会と國家の「対立」が顕現していたかどうかを。

私は別に皮肉でなく、スターリン主義者に抑圧されて、市民社会論的マルクス論が戦後に育たなかつたことを、この国の一つの不幸だつたと思う。戦後民主主義がもつと自信をもっていたら、

「わが敵・戦後市民社会」は、安保闘争の私たちのまえに、もつと明確な姿をあらわしていったろう。もしそうだったら、その後の戦後社会の解体期は、ひよつとして古典的階級革命論を実現していたかもしれないのである。

平田氏らが、歴史的には近代市民社会の成立期をモデルに思考するのにたいして、私はいわばその解体期の様相を今日の状況にみている。「資本家社会」を間にはさんで、市民社会の成立期と解体期の問題意識が、もしかしたらかの六〇年代の終りに、ちよつと交叉したのだったかもしれない。

## 生産社会から福祉社会へ

今日の大衆が階級として解体されているばかりか、戦後社会と比べて生産者——「個的労働」——の意識をも欠いているという認識は、もう一つ別の感想に私をさそう。この社会にとって、いま、「生産」とはどのような意義をもつものなのか。

「生産が市民社会の最深の問題」だと平田氏も書いている。ここで「最深」というのも、市民社会は「表面」流通Ⅱ交通、すなわち商品交換の社会だが、その「内実」は生産だという意味である。むろんこの生産も、現実には資本制生産であるといわれるのだが、しかし、資本制的である他の何的であれ、今日およそ「生産」とはなにかと問うてみざるをえないのだ。

というのも、私はさきに、労資二大階級の階級関係が、両者の運命共同体に局限され、この島宇宙を大衆がとりかこんでいると書いた。とすれば、二大階級の階級関係を再生産しているはずの資本制の「生産」もまた、「大衆」の「外部」にあつて、その基本的な規定要因ではなくなっているのではないか。つまり、「生産」は今日の社会の「最深の問題」ではないのだ。階級の解体——大衆の成立という状況のそれこそ最深部に、人びとが「生産」を奪われているということがあるにちがいない。

これに比べるなら、戦後の社会がまさしく生産に定位していたことは、「生産復興」のかけ声一つを聞いてもわかることだ。私のいう戦後社会も、「職業団体」を結ぶような「産業人」によつて成り立っていたことは、ことわるまでもない。戦後社会が一種の「階級社会」だったのも、それがまさに基底的に「生産」社会だったからにはかならない。逆にいえば、「生産」という基底の喪失が、戦後社会の構造を、今日のような「大衆」の豊かな廃墟に変えた根本の要因ではなかつたらうか。

たとえば「福祉社会」とか「管理社会」とかの本当の意味も、生産関係——階級関係が、社会の基本構造たりえないということにある。ここで「福祉」とは、身障者など、狭い意味での「弱者」にたいする国家給付のことではない。世界の「工場」として防衛された利潤の一部が、外部の大衆に還流される仕組みである。

たとえば今日の国家予算の四分の一を占める膨大な「福祉関係費」を見るとよい。大衆と資本の関係が固有の生産の原理にもとづきえないため、この原理のもとにある二大階級がその利潤を、

経済政策として——「経済法則」に逆らって——大衆に還付するしかないのである。それが広い意味の福祉である。

事実、近年になって、資本と労働組合から、等しくその「社会的責任」や「分配の公平」が唱えられるようになった。総評のいう「国民春闘」とか「弱者救済」がなにを物語っているか、おのずと明らかなことである。またたとえば、五百万戸農家のうち百万戸を「中核」として残し、あとの農家は「農政」の対象ではなく「厚生」の対象だと、経済学者の大内力氏がいみじくも書いたことがある。そしてスターリニストとコミューン派を問わず、おしなべて革命についての問いを手ばなしてしまっている状況のなかで「現代社会主義論」と称するソフトスターリニストの提言が現われてくる。

これは要するところ、「分配の公平」を軸とする福祉社会主義であり、「工場」とその二大階級のモダンなイデオロギーである。別に革命後の話でも「将来への提言」でもない。このイデオロギーに準拠してみれば、日本社会はいまやすでに立派な「社会主義体制」にほかならない。ソ連の党官僚のいい草ではないが、「わが国にはすでに階級というものはない」のだから。

ことわるまでもなく、福祉は昔風の救恤事業ではない。すでにヘーゲルは、有産者による貧者の救済に触れ、これは労働による生計の保証という「市民社会の原理」に背くと書いた。しかし他方、労働の機会を彼らに提供すれば、「生産の過剰と消費者の欠乏」によって「まさに弊害は増大するばかりである。」（二四五節）今日の社会が、いまも変らぬこのジレンマ——「富の過剰にもかかわらず市民社会は十分に富裕ではない」（ヘーゲル）——の解決に腐心していることは、周知の事実である。

だから、大衆への「福祉」の撒布は回収されねばならない。——これが「管理」にほかならない。管理の関係はむろん「経済外的」なむきだしの権力支配ではないが、だからといって「自然法則」的経済法則にもとづく階級関係なのでもない。「福祉」と「管理」の循環関係が、今日の二大階級と大衆との収奪の関係であり、また政治的な支配関係をなしている。

マルクス主義のいう二大階級（の関係）が、文字どおり直接に（資本制的）「生産」にもとづいて定立されていることは、常識に属する。私は次の章でこの常識を納得のいくまで検討してみようつもりだが、平田清明氏が「市民社会の最深の問題は生産だ」というのも、むろんアダム・ミスではなく、マルクスによる解釈である。

アダム・スミスの市民社会は、労働力商品の所有者もふくめて、万人が平等で自由な商品交換者として交通する、純粋な「商業社会」である。したがって、貧困や階級対立は事実として指摘されても、「階級社会」は理論の問題にはなりえない。さきに引いた高島善哉氏の言葉にあるように、この市民社会像には「国家と市民社会の対立というようなものはない」のは当然である。したがって「階級国家」もまた問題たりえない。

古典派経済学のこのような市民社会像にたいするマルクスの批判が、商品交換のレベルから、資本制「生産過程」に踏み込むことよってこそ完遂されたのも、もつともなことだった。廣松渉氏を援用すれば、「スミスにおいてすら『生産』ということはいわば私事なのであり、人びとが生産物（生産の結果！）をたずさえて交通しあう場面からはじめて社会がはじまる。」「これ

に対してマルクスは、まさしく生産の場面に定位して『社会』というものをとらえる。」（『唯物史観の原像』）

とすれば、「生産」そのものが見えなくなっている今日の状況は、なによりも「生産の場面に定位する」、マルクス主義の社会観の根底を奪うのではないのか。いま「階級」も「階級国家」も、理論の言葉たりえないのは根拠のないことではない。そして、今日の大衆のラジカリズムが、古典的階級革命論の構図にのってこないのも、当然といえば当然なのだ。

## 第二節 大衆の豊かな廃墟——風土なき都市

### 産業都市のプロレタリア風土

私は前節のはじめに、アダム・スミスの流れをくむ市民社会論・マルクス論が、大衆ラジカリズムの初期の担い手たちに好んで読まれた事実をとりあげた。スミスの「商人」や平田清明氏の「個体」とは、大衆の「個人」はずいぶんとちがったものだったが、しかし期せずして、大衆が「生産」を奪われているという状況が、当時のスミス流の市民社会論リバイバルに反映していたのかもしれない。

このことは、私をさらにもう一つ別の感想にさそわずにはいない。——高度成長期に、この国の全国士を「消費社会」、つまり「都市」がおおいつくしたという事実についてである。この都市は「産業都市」という古いイメージにすこしもそぐわず、むしろ「生産」を奪われ、「階級」を解体された「大衆」の場所こそ、いま都市なのではないのか。

私は「産業都市」と書いたが、たとえばエンゲルスの論文に、『住宅問題』（一八七二年）という奇妙な論稿がある。エンゲルスは若い頃、ロンドンをはじめとするイギリスの古い都市が、突如として新しい産業都市に変貌するのをつぶさに見る機会をもった。（ディケンズと同じように。）「一方では農村労働者の大衆が、工業的中心地に発展する大都市に突然ひきよせられ、他方これら旧都市の建築設備は、あたらしい大工業およびそれに適応した交通の諸条件にはもはや適応しなくなり——街路は拡張されたり、あたらしく開設されたりし、そのあいだを鉄道がとおされる。労働者が群をなして流入するその瞬間に、労働者住宅が大量にとりこわされる。そこで労働者や労働者を顧客とする小商人および小工業者の住宅難が突如としておこる。」（マルクス・エンゲルス選集第十二巻——以下同様）

こうして、「人道上の見地」からも、また進んだブルジョアの観点でも、都市下層労働者の環境問題（労働力商品再生産の保障）は、無視しえないものとなったのである。ドイツでも、『住宅問題』が書かれた頃、『ブルードン主義者』がようやくこの問題を取りあげはじめていた。時あたかも、「ドイツが統一国家としてばかりでなく、大工業国としても世界の舞台に登場してきた時代」だったからだ。

一見して、問題の状況は、一九六〇年代後半からのわが国の「環境問題」にそっくりである。けれども、これにたいするエンゲルスの問題の立て方は、わが進歩派くずれとはまるでちがっていた。だからこのことが、はからずも、今日の消費都市と古典的な産業都市のイメージの差異を、明瞭に示すことにもなるのだ。

すなわち、エンゲルスは、今日の風潮に反して、人びとが地方の共同体を追われて都市に流入してくる事態を、歴史の必然としてばかりでなく、労働者階級の闘いの前進にとつても、「巨大な進歩」（平田清明！）だと評価する。なぜならこの趨勢こそ、「鳥のように自由なプロレタリアート」の形成と集結を告げる、巨大な「経済的革命」を意味しているからだ。私の関心からい

えば、まさにエンゲルスのこのような評価が、「産業都市」の古典的イメージを明らかにするはずである。しばらくは、エンゲルスがいかに彼らしい筆致で述べるところを聴くことにしよう。

「プロレタリアートという近代の革命的階級をつくりだすためには、過去の労働者をなお土地につないでいた臍の緒をたちきることが、絶対に必要であった。織機のほかに自分の小部屋、小菜園および小畑をもっていた手織工は、いかに貧しく、また政治的にいかに圧迫されていても、おだやかな、みちたりた『きわめて信心ぶかくて正直』な人間で、金持や僧侶や官吏のまえにでると帽子をとった。そして心のうちは徹頭徹尾奴隷であった。（「自他の区別のないべつとりとした共同体的関係に埋没した人間の自己感覚」——平田清明）。土地にしばられた労働者から、まったく無一物のいつさいの伝統の鎖からときはなたれて自由な、鳥のように自由なプロレタリアをつくったのは、ほかならぬ近代の大工業であった。すなわち、資本主義的生産における労働者階級の搾取を転覆しうる唯一の条件をつくりだしたのが、ほかならぬこの経済的革命的な第一の条件をなしていた、労働者の家とかまどからの駆逐を、あたかも大きな退歩でもあるかのようになげくのである。」

じつは、ブルードン主義者のなげきとは逆に、「土地にしばられた労働者」（土地持ち労働者！）の残存こそはプロレタリアートの労賃の不当な切りつめの要因にもなっているのだ。なぜなら、賃労働者が家賃を支払わなくてよいということは、労働者の生活資料を安く見積らせることであり、その分、正当な支払い労働分の労賃が切り下げられるからである。

それゆえ、土地持ち労働者を讃美し、大都市のプロレタリアートに住宅を与えよと要求するブルードン主義者は、「経済的革命」に逆行するばかりか、プロレタリアートの労賃の不当な切りつめにも同意するものにほかならない。住宅の要求だけではない。労働者の生活資料の節約に帰着するいつさいの「社会改良」は、それに相応した賃金引き下げを結果するだけなのだ。「住宅問題」や「都市問題」を、それ自体として解決せんとすることは反動である。住宅不足の解決には、ブルジョアの邸宅の「占拠」——これしかない。

エンゲルスが「住宅問題」にどう答えているかはすこしもはっきりしない——事実、「私ほもちろん、いわゆる住宅問題を解決しようなどとは思っていない」と書かれている——が、彼が以上で強調したかった点はきわめて明白である。

いま「都市」の問題にひきつけていえば、大工業の資本制的生産を中軸とする産業都市こそが、彼にとって近代の都市である。そこに発生する賃労働者の環境問題も、いわゆる都市問題として解決をはかつてはならないのであって、近代プロレタリアートとブルジョアジーの階級闘争こそが、なによりも隠蔽されてはならない真実である。階級闘争の勝利的展開こそ、賃労働者の利益増大の獲得を通じて、結果的に都市問題の改良をも可能にするものでなければならぬ。

突飛なようだけれど、この産業資本時代のエンゲルスの都市像を読んで、私が連想しうるのは、東京のような大都市よりもむしろ、いわゆる企業城下町である。この町では、特定の産業（それも製造業）を中心にして、すべてが立地されている。そして経済的にも政治的にも、二大階級、つまり「会社」と「労組」とが、この町の基本的運営を決定している。賃金ひとつをとっても、

両者の交渉や対決で決定されることはいうまでもないが、これが周辺の「小商人や小工業者」の収入、そしてその従業員の賃金へと、確実に波及する仕組みになっていた。「労組」は町の働く者総体の代表として、「会社」と「階級闘争」をするのだとみなすことができたのである。

したがって、「住宅問題」などの社会改良（福祉！）もまた、人道的見地や世論の圧力ではなく、むろん国家の「社会政策」によるものでもなく、この階級闘争の派生的な獲得物と考えることができた。エンゲルスによれば、近代プロレタリアートの都市における階級闘争こそ、ブルードン主義者その他あらゆる社会改良主義者にたいする、決定的な武器となるはずであった。

企業城下町の以上のような産業Ⅱ都市の構造は、典型的なものではあっても、決して特異な例ではない。産業に立地する古典的都市に、多少とも共通する特徴である。そして、このような都市が、「産業社会」の基幹的構造をなしていたこともいうまでもない。一言でいって、この社会は、産業都市Ⅱ階級社会だった。

前章のはじめに、私は「戦後社会」のことをとりあげ、それが「一種の階級社会」だったと書いた。「職業団体」の階級形成とそれらの相互関係が、この社会のまさに基幹的な構造をなしていた。ということはつまり、戦後社会とは右に企業城下町に典型を見たような、産業Ⅱ都市社会にほかならなかったのだ。

たしかに、産業都市の「階級闘争」という点では、エンゲルスの期待はわが国ではたいして実現されはしなかった。ことに典型たる企業城下町では、労働者階級は戦後早々と、改良主義者の主導するところとなった。けれども、のちにくわしく考えるように、じつは産業都市には社民型労働運動のほうが、むしろ自然な帰結なのである。エンゲルスのお膝元でも、彼の死後すぐに明らかになったとおり、実情はわが国の企業城下町の例とたいして変りはしなかった。だか、こうした実情にもかかわらず、二大階級を中軸とした都市の構造自体は、ドイツでもわが国の戦後社会でも、すこしも揺らぐことはなかったのである。

## 大衆の場所——消費都市

ところが、一九六〇年以降の全国的な「都市化」が、ほかならぬ以上のような産業都市Ⅱ企業城下町構造の解体をともなつて進行することになった。むろん、内部の階級闘争の結果ではない。解体の基本的要因は、むしろ旧産業都市の「外部」からやってきた。つまり、産業の高度成長は、「土地にしばりつけられた労働者」の大群を、まさにエンゲルスばりに、新たな都市へと追いつて、これが全国的な都市化の波をつくったのだが、しかし彼ら流入労働者は、新たな都市で、企業城下町の産業Ⅱ階級構造に組み入れられはしなかったのである。旧産業都市は、彼らの流入で水ぶくれし、このことによつて明瞭な階級構造をもあいまいにしていく。そして他方、ひとも知るとおり、旧都市の周辺に、ベッド・タウンあるいはニュー・タウンという膨大な「消費都市」をつくつて、彼らの大部分は住みついたのであった。

旧産業都市は、まさしく新しい都市に重包围されたのであり、これがひいては、企業城下町に

典型をみせたような都市構造をも解体させることにもなったのだ。

親しい例をあげれば、企業城下町風のいわゆる「職住接近」の構造を、都市は全体として失うことになった。社会学いうところの、「職場」と「家庭」、「生産」と「消費」の分離である。つまり、端的にいえば、今日の都市はまさに「生産」から分断されたのだ。そして生産から分断された今日の都市では、さながら古典的な市民社会像に似て、平等な商品交換者（消費者）の相互連関とアトミズムとが、ともに極端な形をとっているのである。

私は「職住接近」の都市構造が見失われたと、常識的なことを書いたけれども、この状況が革命論のゆくえにもつた意味はとて大きい。新しい消費都市こそは、まさしく「大衆」の場所である。もしも農村からの流入労働力が、新しい都市においても「組織化」されたのなら、都市の階級構造の解体などをとりたてていうことはない。

しかし実際には、既成の労働組合の組織率はかえって頭うちとなり、新しい労働者組織が生れたでもない。戦後のスローガン「未組織労働者の組織化」は、いつのまにか「非組織労働者」の組織化に代えられた。都市の流入労働者は、将来の組合員の対象とみなすことはもはやできない。生産の基幹を失った消費都市に滞留する大衆というほかないのである。

しかしそれだけではない。反戦派労働運動とか地域住民運動とか、この間の大衆的ラジカリズムが展開された主要な地盤が、まさに新しい都市なのであった。エンゲルスは、生活協同組合運動など、労働者の生活や環境の改善運動は階級闘争の真実を隠蔽し、さらにプロレタリアートの賃金低下を招くものとして非難した。しかし、新しい都市における右のような大衆のラジカリズムのことを考えずに、今日の革命についての問いなどはない。また、旧産業都市における二大階級の階級闘争を、いまどのようにひねってみても、革命の問いは生れえないことも明白である。

たぶん、今日の都市は、生産という下部構造では規定しえない、独自の経済的単位にまでなっているにちがいない。私が前節でとりあげた「福祉と管理」の循環関係が、まさしく新しい大衆都市を基盤にして展開されている事実は、このことをよく物語っている。ということは、生産の原理とは別の収奪と給付の経済関係が、都市を独自の対象としていまや成り立っているにちがいないのだ。

性急にいえば、周辺都市と大衆とは、二大階級の生産共同体から見て、一種の「植民地」に似ている。これは、産業都市型の生産・階級関係が、新しい都市と大衆に重包囲されている事実の逆の表現である。だから、こうした関係がまた、生産の現場——「生産点」——での会社と組合との「階級闘争」を、大衆にとってのまさに「私事」、いや、反感の対象にまで疎外しているのである。

都市の大衆が生産と生産共同体に反乱を開始したとき、右のような関係の秘密は一挙に露呈するにちがいない。いや、すでに都市住民の公害反対運動などが、事実上この秘密に触れるものであることは周知のとおりである。あるいはまた、労働者のラジカリズムが「生産点」での反乱を開始するとき、これに立ち向ってくるのが資本と労組の同盟軍であることも、この間くりかえされた出来事であった。彼ら労働者は、逆説的にも生産の外に追い出され、新しい都市にあふれ出る形でしか、そのラジカリズムを發揮することができなかった。生産を奪われた都市は、くりか

えすが、かえって大衆とそのラジカリズムが生起する場所なのである。

## プロレタリア風土の解体とマルクス主義

さて、高度経済成長と農業（農村）の全国的な解体によって日本列島をおおった「都市化」とは、以上のような意味で「産業都市」から「消費都市」への都市の変容であった。例えば六〇年安保闘争は、都市の大衆の問題を、はじめてまざまざと見せつけるとともに、他面では、企業城下町型産業都市における労働者階級の急進主義に、明白なピリオドを打ったのだった。すなわち、三池闘争である。戦後の用語である「勤労大衆」というニュアンスが、都会の大衆デモから抜けしていく。そのぶんだけ、三池闘争はアンポとの内的「結合」を欠いて孤立していった。

エンゲルスではないが、かつて産業都市の成立は、農村に代る新しい都市の風土を形成するものだった。むろんこれは、大地に根ざした伝統的な風土とは別のもので、かえってその解体から生れるものではあったが、産業の立地ということが都市大衆の新たな風土となったことは明白である。企業城下町という名前がよく示しているように、そこにはいかにもプロレタリアのものらしい、生活と闘争の風土が造形されていた。今日でも、名のある企業城下町を歩いてみるだけで機械油のしみついたこのプロレタリア的風土の名残りをみることができ、それがいかにいまの都市と異なっているかを納得することができよう。（これはいくぶんかは、コンビナートという今日の大工場の立地様式にもよるであろう。コンビナートほど企業城下町のたたずまいからかけなれたものではなく、地方に突如として出現する殺伐な出城とでも形容するほかない。）

ともかくいずれにしても、新しい大衆都市による産業都市の解体は、企業城下町に典型的にみられたような、プロレタリアの風土を解体することであった。そして、この動向は反面で、ほかならぬ伝統的な農村風土の最終的な解体によってこそ生じたのだから、事態はおよそ風土というもの——つまり、国土——の解体を意味したのである。だからまた、今日の都市は、あのなつかしい「都市と農村の対立」における都市ではない。この対立そのものの解体として、都市はいま、国土Ⅱ風土の廃墟を象徴するのである。

さて以上のような状況のなかに、あらためてマルクス主義を立たせてみるなら、それがまさしく「生産に定位」するがゆえに、事態はゆゆしい問題となるはずである。

マルクスもいうように、資本制の生産こそは、二大階級の階級関係（闘争）をも生産し、再生産する。もとよりこの関係の秘密は、前近代の農奴と領主の関係のように、労働者に直接目に見えるものとはいいがたい。しかしすくなくとも、生産点での関係が同時に都市の構造でもある古典的な産業都市では、階級の関係がそのまま空間的な区分と重なっていた。そのようなものとして、プロレタリアの生活と闘争の風土が、そこに蓄積されてきたのである。ヴェルヴィルとかヴイボルグとか三池の炭住とかを、ちよつとでも想起するとよい。

ところが新しい都市は、生産というものを社会の規定的位置から追いだしたばかりか、生産における階級関係をも、労働者にすらまったく目にみえないものとしたのである。周知のように今

日の都市では、人びとはみな自分を「中流」に属すると思っている。かつてエンゲルスが、今日では無作法なほどはつきりと、「鳥のように自由な」プロレタリアートの産業都市への流入を歓迎したのは、だから理由のないことではなかったのだ。

実際、貧乏な一経済学者の孤独な理論の営みを、全世界に波及させる決定的な力となったのは、ドイツの「鳥のように自由な」プロレタリアートが、マルクス主義と結びついたからにほかならない。しかもこのドイツ労働者階級は、いわば企業城下町的な形で、産業都市を構成していたにちがいないのだ。労働者階級の力が増大し、これとマルクス主義政党との結合が強固になるにつれて、都市はますますドイツ社会民主党の牙城の観をも呈してくる。

のちにナチズムがマルクス主義に攻撃をかけたときも、それは、こうした労働者階級の牙城にたいする、「外部」からの「大衆」の攻撃であった。というのも、一般にファシズムとは「大衆の革命」であり、産業Ⅱ都市の階級的な構造にしっかりと組み込まれていない者たちが、「特権的」な労資の二大階級に敵対するのである。ドイツの例では、たとえばシェリダン・アレンによる詳細なケーススタディ、『ヒトラーが町にやってきた』が暴露しているのも、このことである。そしてイタリアでは、事態は一層直截な形をとった。タスカの名著『ファシズムの起源』が主張するとおり、ファシズムは、農業労働者をふくめた労働者階級の「城」にたいする、周辺農村からの「大衆」の攻撃であった。

比喩的にいえば、ファシズムは、「特権的」な都市労働者階級にたいする、差別された周辺「植民地」からの反乱であった。こうしたことのいくぶんかは、田舎にとりかこまれた「点」という性格の、ヨーロッパ大陸の都市のあり方にもとづいていたかもしれない。

以上のように、マルクス主義の歴史は、イデオロギーとしてばかりか事実としても、産業Ⅱ都市の労働者階級と枢要な結びつきをもってきた。だが考えてみればこの結びつきは、マルクス主義を「革命」に結合することと同じことだったかどうか。別のいい方をすれば、今日の大衆の都市にとつて、「生産」を奪還することこそが、マルクス主義の古典的革命論の復権につながるというのだろうか。

私は次章でこの問題を理論問題として検討するつもりである。しかし事実をいえば、周知のようにすでに前世紀の末、ほかならぬ産業Ⅱ都市というドイツ労働者階級の牙城で、この階級の階級闘争と「革命」とが、まさに背反するものであることが露呈されたのだった。三池争議を最後として、わが企業城下町の階級闘争が戦後いち早く協調主義に転換しおえたのも、ドイツ労働者階級のはるかな踏襲を意味していた。

なるほど、今世紀初頭、第二インターの修正主義批判を経て、ボリシェヴィキのロシア革命は、再度「革命」を復権してマルクス主義の名譽を挽回したかにみえた。たしかにロシア革命はマルクス主義の一大センセーションであり、第二インターのいたらくをつぐなうてあまりあるものと思われた。だが、レーニンのロシア革命が復位したのは、第二インターの修正主義者たちが背いた正統マルクス主義の革命論、つまり、生産―階級闘争―労働者革命プロレタリアというトリアードであったかどうか。

事実は、かく単純では決してない。ところが実際には、マルクス主義とドイツ労働者階級との結合、およびロシア革命というマルクス主義史の二大センセーションは、同じくマルクス主義の成果として、無批判に同一視された。そしてこの同一視が、革命についての問いに、今日にいたるまで混乱をもちこむことになったのである。

じつのところ、両事件をマルクス主義の「物質化」として同質にとらえることは、第二インターとドイツ労働者階級の「体制化」を、「修正主義的指導部の裏切り」のせいにするそのかぎりで可能となったにすぎないのである。いいかえれば、労働者階級の階級闘争そのものではなく、そのうちの「左翼反対派」の観点に立つてのみ、マルクス主義の革命論は、初期からロシア革命を経て今日まで、その終始一貫性を誇ることができているにすぎない。ロシア革命以降、マルクスレーニン主義には、労働者階級内部の「左翼反対派」という存在が、不可欠の要素となったのはこのためである。私は次章で、この左翼反対派の立場を、あともどり不可能にまで解体する作業を試みたい。これなしには、マルクス主義あるいは労働者階級と「革命」とのあいまいな結びつきを、断つことができないと思うからだ。

## 第三節 大衆のラジカリズム

豊かな廃墟のなかのラジカリズム

さて最後に、ふたたび大衆のラジカリズムの問題にもどろう。私はこれまで、まさにこの「大衆」の成立を告げるメルクマールを、今日の「状況」のうちに確認しようとしてきたのである。「大衆」の状況こそは、今日の急進主義を形成し、性格づける真の母胎である。また逆に、六〇年以降の大衆的なラジカリズムの経験からみるときにはじめて、状況の意味もまた明瞭となる。今日の大衆のあり方こそは、安保闘争以降の急進主義の歴史が明るみに出した最大の案件である。――私はそう思う。

そこで私は、このような大衆のあり方を存在論的基底として起ってくる反乱を、あらためて「大衆のラジカリズム」と呼ぶことにしよう。

序章に述べたように、「反近代」のラジカリズムが古典的な階級革命論にすこしもつながらないのも、それが「大衆」の反乱である以上当然だと、いまやいうことができる。大衆は「階級の立場」を欠くばかりか、「消費都市」を舞台とするかぎり、さしあたつては階級というものを問題にすることすらできないからだ。いわゆる反戦派労働運動で、労働者の急進主義が、生産点の階級関係を離脱して都市の街頭にでることではか発揮できなかった例を想起しよう。このことによつて、二大階級の生産ブロックが、ラジカリズムに保身的に敵対するものであることが、逆に明るみにでたのだつた。

といつてもむろん、二大階級の生産Ⅱ階級ブロックは、経営内部の支配秩序と同じ原理で、大衆を支配関係にとらえることはできない。大衆Ⅱ消費都市を自己の原理の「外部」につくりだすことによつて「福祉と管理」を通じた支配と収奪の関係を後者にはりめぐらさざるをえないのである。これがむきだしの権力支配でも、階級のヒエラルキーでもないことは、くりかえすまでもない。

けれども、二大階級のブロック対大衆というこのような構図が、逆に大衆のラジカリズムを、「反近代」の否定の抽象性に追いこむ要因ともなっている。今日のラジカリズムでは、階級闘争ばかりかおよそ政治的関係そのものが容易には成り立ちがたいと私は書いたが、これも「反近代の思想」の抽象性によるというより、この社会の支配関係の特異性にもとづくのである。

つまり、二大階級のブロックは、通常大衆Ⅱ都市の彼岸にあり、大衆の決起は福祉と管理の循環路に回収されて、たやすく彼岸にまで到達することがはばまれていた。福祉と管理の関係は、そのうちで大衆のたしかな敵を見失わせ、いきおい一般的な「反管理」とか「反権力」とかのほうに、闘争を疎外させることになる。あるいは、度を越えた反逆は市民社会のアウトローとして、社会の「外」で警察の力で処理される。

こうした事情から、大衆の急進主義的運動は、ほとんどのつけから「正」と「反」の二者択一を提起し、そのことによつて、運動はラジカルな反乱として現象すると同時に、他面その大衆的

形成過程が短絡されてしまうのである。あとには、具体的要求は文字どおりに具体的エゴイズムとなるか、あるいはスローガン上の「反権力」の高唱だけが残ることにもなるのだ。

そして、こうした事情は、あげて運動の「主体」の性格に現われてこざるをえない。大衆の一人としての「この私」が実際に誰であつても、権力との対決の場面で、「私たち」の連帯、つまり共同性を具体的に特定することが困難となる。労働者階級とかそれとの統一戦線の一翼とかに「位置づける」ことができないのである。それはただ何事かに「反対する」者たちとしてさしあつたつてはネガティブに規定するほかはなく、しかもそれだけではない。この反対が「反権力」「近代」という否定の一般性にまでつきつめられるとき、じつは私の立場は、あたかもかつての「人類的立場」に似て、抽象的で一般的な「私」へ追い込まれていく。

すでに引用したように、花崎皋平氏は、「今日の巨大化した国家の否定的威力」にたいして、「個々人の精神に内面化された否定的威力」をもつて拮抗する、と書いた。みられるとおり、対立はのつけから「巨大化した国家」と「内面化された自己」との間に設定される。だからこそ、ここにいる「個々人の否定的威力」も、「ひらの具体的人間」（平田清明）のものではありえないくなるのだ。「否定」一般としては、むしろ「無」というほかないであろう。「この私」のこのような抽象化は、権力に対決する私自身にとつて耐え難い。

耐え難さは、他方、私の対決する権力・国家の「否定的威力」の側からもやってくる。極端な形をとつた資本のコスモポリタニズムは、日本の国家というものを「国土」という地盤から解体した。近代の生産労働の原理をこの国の戦後はいわば極限的に――西欧以上に――展開することによって国土を一つのコンビナートに変え、ナシヨナリズムを内部から解体したのである。

だとすれば、コンビナート国家にたいする「反近代の思想」には、日本的近代化にたいする負の加速度がただちにかかるはずである。ブルジョアとともに、反近代・反権力の思想もまた、逆方向に「国家」を超越する。資本の汎世界性にたいする、反資本の、負のコスモポリタニズムである。

これがために、反権力の思想は、生産点であれ他のどこであれ、国土の一角に足場を固め、そこに「原初の革命綱領」を結ぶのでなく、避けがたく、肥大化した「否定」の一般性にみずからを解消する。

## 失効する新旧左翼の革命論

「大衆のラジカリズム」の性格に関する以上の簡単な指摘は、ことに全共闘運動以降の運動組織論を点検すれば、詳細に検証することができる。いずれにしても、今日のラジカリズムは、戦後社会の廃墟における大衆と国家のあり方、つまり、「状況」のなかで、その加速度を不可避的にうけて形成され、かつ消長をくりかえしているのである。そして、大衆のラジカリズムはまた、古典的階級革命論がどこかでとことん失効したことの証左であり、しかもいま「革命について」の問いを再建することの困難さを示すものとなつていく。

それでは、こうした状況のなかで、新旧左翼の古典的革命論はいまどういうことになっているのだろうか。しかしこの点については、私はもう十分に書きつくした気がする。ここでは、必要なぎりぎり、簡単に脈絡をたどるだけにしなければならない。

たとえばその昔有名な「学生運動の先駆性理論」というのがあった。この理論が学生の先駆的決起につづくべきものと期待したのは、ことわるまでもなく、「民衆」一般というより労働者階級プロレタリアートを指していた。

しかし、六〇年安保闘争でこの国の労働者階級が都市Ⅱ大衆の決起に屈し、後者の第二戦線にすぎなくなったとき、決定的な転換がはじまったのである。今日からみれば、以降のラジカリズムの歴史が、労働者階級Ⅱプロレタリアートのありかを見失っていく過程だったことは明白である。むろん、別の階級が代って発見されたのではない。革命論のなかで「階級」という基軸そのものが見失われたのであり、したがって、古典的革命論そのものが根底から無力化するのである。

しかしそれにもかかわらず古典的革命論が息の根をとめないのは、状況がどのようなものであっても、ひとは「左翼反対派」の幻想にすがることができるからにほかならない。ただ、この幻想のうちには、時のたつうちに真実なものもなくなるのだが。

たとえば、ブントゆかりの左翼反対派急進主義の歴史から、赤軍派が登場した例を思いだしてみよう。これが登場したとき、私の最大の関心は、この派が無意識のうちに体現した真正ブランドムの組織思想に向けられた。実際、彼らの宣言は、「大衆を組織する」仕事をさしあたっては放棄するとはつきり書いていたのである。

ここには、先駆性理論の極端——「前段階蜂起」——や、「大衆に革命はできない」という決意以上のものがみえていた。ブントゆかりの革命論が、その「主体」としての「労働者階級」を失ったばかりか、主体の大衆性そのものまで見失ったことがここに表白されている。

逆にいえば、今日の大衆が階級の視点ではつかみえないという事実が、革命論の一つの隘路——特別の人間（戦士）の軍事的形成——に追いこんだのである。そしてこの隘路にいたれば、労働者階級内部の「左翼反対派」という幻想も、事実、完全に捨てられていることはいままでもない。

こうしたやっかいな「大衆」の存在は、赤軍派ゆかりの武闘派のうちにも根本のところではまわった。たとえばそのどん詰りに、東アジア反日武装戦線の爆弾テロがあった。その宣言のいうところでは、アジアへの侵略に加担するような日本の大衆は、テロの巻きぞえで殺してもよいとする。もしも、赤軍派以降の脈絡のなかでこれを裏目読みするならば、日本の大衆は、組織対象としてとりあえず放棄されたところか、「抹殺」の対象とすらなっているのである。私はそこに、革命論が抹殺し、逆に革命論をそこにまで追いこんだ「大衆」のいちじるしさを読む。

「大衆」のいちじるしさは、その反面で、社会の構造が総体として見えなくなっている事情をも意味している。そこにまさにテロリズムが起ってくる。なぜなら、国家権力と一般民衆とを媒介する政治的諸集団が、相互に抗争と同意をくりかえしながら国家・社会の政治的意志を形成していくという政治社会の構造を欠くとき、テロは、市民社会の「私人」と政治国家とを短絡させ

る政治行為となるからだ。

そして事実、戦後社会の解体という状況こそ、「職業団体」という政治的媒介を解消し、いまや若きマルクスの指摘どおりに、ありのままの社会と政治との端的な「分離」を現出せしめているのである。

だから、戦後社会とちがって、いま大衆のなかの不満は、労働組合や政党を通じて代表されえない。しかも、これらにたいする左翼反対派の位置に安住することもできない。いや、そうした形の政治的な疎外を受けえない者として、大衆は大衆なのだ。このとき、「この私」の否定的意志はテロとなりうる。そしてテロが切り裂く相手もまた特定のなにか——「攻撃目標」——であるというよりは、私の「否定」の抽象性が向きあっている一つの抽象的「世界」なのだ。

テロと国家権力の「治安」とが双生児であるのも、同様な事情に促されていることである。政治権力は、かつてのように大衆集団と「取引」する形で大衆の不満を決済しえないため、いわば大衆と直接向きあわざるをえず、これが過激派にたいして「治安」という形をとるのである。

それゆえ、テロと治安が一見先端的な政治行為に見える社会こそ、実はまさに「政治社会」の解体を意味している。政治が、政治国家と市民社会の関係を構造化することに失敗しているのである。今日の大衆のいちじるしさをまえに、政治的国家みずからが、社会の総体的ビジョンを見失っている。

それゆえ以上のような意味で、ブントゆかりの急進主義もテロリズムも、私のいう大衆のラジカリズムの一例と私はみなす。古典的革命論から派生した革命主義みずからが、事実としてこの革命論のいちじるしい失効を物語っているのである。そして——私はさらにつけ加えねばならないが、一見、大衆の急進主義の対極にあるかにみえる旧左翼穏健派をも、同じ状況が深く規定しているのだ。

たとえば日共の「宮本路線」、これは営々きゆうきゆうとしてありのままの都市大衆——「住民」——に近づこうとする路線として特徴づけることができる。そのためにマルクスレーニン主義の教義はとめどなく放棄され、また「一部労働者階級」も、明らかに日共の主要な関心の外におかれるようになった。宮本路線が八回大会以降十五年の「発展」を誇るとき、それはまさに、一九六〇年以降の「大衆」の存在に強制されたものでなくてなんだろう。そして、このようにしてまで大衆に近づこうとしながら、日共が大衆の根強い不信感と猜疑心によってどたん場で「反逆」されることも、今後とも変らぬ真実なのである。

ということとは、「ありのままの大衆」というときのその「ありのまま」について、彼らはどこかで決定的な誤解をしているにちがいないのだ。

例えば古典的見地では、ありのままの民衆は「日常闘争」と「啓蒙」を重ねることによって、徐々に「意識変革」するものだと考えられている。だが、じつのところ今日の「ありのままの大衆」は、日常的無為とラジカリズムとかほとんどこ背中合せに反転しあうように存在している。

実際、地域住民運動などで昨日の自民党員が今日は共産党となり、あげくのはて権力とぶつかって検束されるといった例は、いま別にめずらしいことでもなんでもない。——かつて「戦後社会」では、これは絶対に起りえないことだったが。だから多くの論者は、「参加」などという観

点に立って、大衆のマイホーム主義や「新中間層」の保守主義を嘆くかと思えば、他方では大衆の急進主義的暴走を非難することにもなるのだ。

このような大衆のあり方を見るならば、まさにマルクスではないが、政治と非政治、公と私、共同と自由等々が端的に分離背反する形で共存（二重化）するところに、「ありのまま」の社会の基底があるといわれないわけにはいかない。そして私は以上に、ラジカリズムと状況のかかわり方を点検することのなから、こうした社会と大衆の存在様式を抽出してこうとしたのである。

くりかえすまでもなく、すべて状況のメルクマールは、「ありのままの大衆」における二律背反に対応することを物語っている。戦後社会の廃墟における政治的媒介機構の解消、そこにおける大衆的ラジカリズムの正と反の極端な分解、自由であることと共同性との背反……等々。そして私はまた、こうした状況のメルクマールにそれぞれ理論の問題をも対応させようとしてきたのだが、そこで指摘された状況のなかの理論の問題意識は、以下、本書の展開では終始伏線となつていくであろう。

ただここでことわっておきたいのだが、今日の大衆や国家のあり方に、もっぱら実践的・過程的に近づこうとする政治的方法を、私は無効と考える者ではない。この政治的方法とは、いいかえれば大衆とそのラジカリズムを一つの事実的「与件」として、これを政治的に（階級に）形成するプロセスを明示的に追求することである。『叛乱論』以降『政治の現象学』までの私の書くものも、せんじつめていえばこの方法にもとづいていた。私はいわば問題を「実践過程に解消」したのである。

けれども、実践に解消する私の方法が革命の問いの脈絡のなかでなにを意味していたのか。――私はそのベースにあるものをはつきりつかみたいと願って、これを書いている。